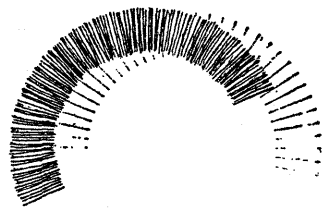


私の保育

——子どもたちとの四季——



久保敦子

春

ばらのアーチをくぐって子どもたちがやってくる。朝、門の前で交すおはようの握手。子どもの手のぬくもりが確実に伝わってきて私が最も好きなひとときだ。

この時期、幼稚園で二年目三年目を迎える年長児と新入園児とは、やることなすことすべて対照的である。

年長児は、部屋にカバンを置くと早いか外に飛び出して来る。そして、誰もいない雲梯をゆうゆうと渡り始めたり、さっそく泥をこね始めたりするのだ。一方新入園児の方はというと、暗い部屋の中でいつまでもモゾモゾしている。彼らには、庭は広すぎるのかもしれない。年少児を受け持った私は、しばらくの間、子どもたちの登園を部屋で待つことにした。自分の組の部屋のことをどういうわけか「幼稚園のおうち」と呼んでいる子があるの

だが、この子のいうように、まず部屋を「おうち」にすることである。私は部屋を子どもたちにとって一番心地良い安堵の場所にしたかった。しかし最終的には、皆をもっとすばらしい表の世界のとりこにすることが私の願いである。表にはお日様の恵みがある。土と水と緑がある。幼稚園が一体となった心地良いざわめきがあるのだ。

さて、日が経つにつれて子どもたちは、年長児や自然の魔力にかかって、どんどん外へ引きずり出されていった。そして、初夏の風が吹き始める頃、ようやく、ほとんどの子どもが雑然とした異年令集団の中でくたくたになつて遊ぶようになったのである。降園前、部屋に分かれて集うひとときは、再び、心落ち着かせる時となった。私は、最初の頃お互いの名前と顔を覚えさせるために考えた、円を描いた座り方を、一方向を向いて体がくっつき合うほどぎゅうぎゅうにつめた座り方に変えさせた。木の床にじかに正座すると、二十一人の子どもと私は小さな丸の中に軽くおさまってしまう。顔と顔が近くあつて、話するにはこれが一番都合が良い。この体勢で、毎日、私たちは歌を歌ったり、昼間の出来事を報告し合つたりした。心なしか、他人どうしだった子ども

たちがぐんぐん親しくなつていくのを感じた。

夏

水あそびが格別気持ちの良い季節になった。早くも陽焼けした子どもたちは、入園当初に比べると格段にたくましく見える。子どもたちはガウンの下に水着をちらつかせて登園し、海の波やホースから勢い良く飛び出す水と毎日たわむれる。庭一面が泥沼になった。泥水が気持ち悪いのだろうか、何となく肩をすほませて立っている。私はKと一緒に水たまりに入り、泥をすくって、指先でKの背中に花の絵をかいた。まわりの子どもたちがおもしろがつて、僕も私もと割り込んで来る。あちらこちらの子どもの背中で、花や動物や乗物たちが元気に踊る。水しぶきが顔にかかると必死に手でぬぐっている。T。水が恐いのだろうか。私はバケツに水をたっぷり汲んでTの後ろに忍び寄る。「Tちゃん!! 頭からかけてあげる。」Tは首を横に振りながら逃げ出した。ダム工事やままごと、お団子作りをしている間を縫って私はTを追いかける。Tは泣いていた。水は嫌いだといった。「そ

れならやさしくかけてあげるから。」ようやく覚悟を決めたTは、両手を合わせて目をつぶり、忍者ハットリ君の真似をする。「そうよ、ニンニンニンよ。」Tの頭の上からバケツの水が滝のようにこぼれ落ちた。

さて、降園の時間が近づいた。水道の前に裸ん坊の行列ができる。「あら、この熊さんは誰にかいてもらったの。」「Aちゃん今日はよく頑張ったね。」とおしゃべりしながら皆の体を手でこすり、泥を洗い流す。「くすぐったいよ。」「我慢しなさい!!」私はこの間、何ともいえないしあわせに包まれている。着換えが終わったあとのほんの少しの時間、子どもたちは冷たい床にころがってお昼寝ごっこをするのが大好きだ。「いまね、こんなゆめをみていたんだよ。」と空想の世界に没り合う。

秋

夏休みをはさんで子どもたちはぐんと変わった。初めの一週間くらいは調子が出ないが、それぞれが友だち関係を強めつつある。Sは目が見えないのだ。Eは双子の兄と別れて一人歩きを始めた。子どもたち相互の結びつ

きが強まると同時に、今まではあまり見られなかったグループ間の抗争も起こるようになった。遊び場の取り合い、人の取り合いからケンカが起こり泣く子が続出。年長の子どもが仲裁役を買って出る場面も多い。部屋の前「あそぶものがないからつまらない。」とわんぱく坊主たちが座り込んでいた。私は子どもの中からそのような言葉は聞きたくない。少しいたずらがしてみたくなった。「これ、おじいさんたちや。私は二、三人を束にして立ち上がらせ、無理やり抱きかかえて行って庭の隅のジャンブルジムの上にボンと乗せた。「助けが来るまでは降りたらだめよ。」「このやろう!!」とくやしそうにもかく子どもたち。「なになに? きちごっこしているの? ほくもまぎして。」と寄って来たのは年長の男児たち。どこにもこういう子たちがいるものだ。そしてこの子たちのおかげでまた、遊びがおもしろいくらい発展するのである。子どもたちは風を切って走り回る。人質をつかまえるために抱きついたり手を引っ張り合ったり、庭中に悲鳴とも歓声ともつかぬ声が響き合った。充満してくるエネルギーを発散したいかのように、この季節、子どもたちの動きは特に活発のようだ。

冬

朝、おはようをする小さい手が氷のように冷たい。山に囲まれた狭い園庭には帯状の日だまりがあるのみである。それなのに、子どもたちは毎日毎日地面に座り込んで砂のお団子を作る。両足の間に乾いた砂を集め、それをすくっては左手の泥団子の上にかけるのである。かけてはこすりかけてはこすり、これを根気良く続けると、表面がすべすべの球になる。それを今度は頬や洋服で丹念にみがくのだ。熟練した子どもたちは、上等な毛の靴下やコールテンのスカートなど、お団子みがきに最適な素材を心得ていて、それを求めて庭中歩き回る。「せんせい!! せんせいのズボンでこすらせて。」「いいわよ。(こわさないように) 気を付けてね。」お団子作りに夢中になるのは子どもたちばかりではない。「顔が映るようなツルピカ団子」を作りたいがために、大人が子どもそっちのけで本気になって、お団子に丸一日をかけることもあるのだ。ある日、私にしては最上のお団子が出来上がった。黒光りした表面に、その日の抜けるように青い

空や子どもたちの赤いほっぺたが映るのだ。降園前のひととき、例のぎゅうぎゅう座りで顔をすり寄せた子どもたちは、お団子を見せると目を丸くして、「せんせい、すごいじゃん。」「せんせい、よくがんばったもんね。」と一緒に喜んでくれた。私は、やっとの思いで満足出来るまでになったお団子をこわされてつかみかかると、男児の気持ちかわかるし、誤ってこわしてしまった側の子がやるせない気持ちになるのもよくわかるようになった。だから、お互いが気の済むまで泣いたり怒ったり、誠心誠意謝まるのを待って、初めて次への励ましの言葉が出るのである。

再び春

年長組の劇「ヘンゼルとグレーテル」が終わろうとしていた。ひな祭りのお遊戯会である。雨がしょぼしょぼ降っている。暗い廊下で出番を待っているのは二十一人の子どもと私。「ねえせんせい。まだ? いったいいつまでまってるの?」「一人がため息まじりにつぶやく。「もうすぐよ。ほら、最後の歌を歌っている。」そこで私

は、子どもたちを手招きで胸元に呼び寄せた。かわいい視線が集まる。実は本番前にどうしても一言、言っておきたいことがあるのだ。他の先生の前では恥ずかしくて言えなかった。「さあこれから本番よ。今日はお母さんたちがいらしているものね。みんな頑張ろうね。……あのね。最後にちょっとお約束してほしいことがあるの。

みんな劇の途中でよく先生の方を見るでしょう。あれはやめにしましょうね。おかしいのよ、すごく。オオカミも山羊もみんなとっても格好よく素敵に出来ているから、いちいち先生の方を見なくても大丈夫よ。今日はね、ドキドキしたり心配になったりしたら、お客様の方を向いてお母さんの顔をさがしてごらん。きつとニコニコして見ていて下さるから。」この場に及んで半ば懇願であった。

四才で入園して以来一年。この子たちは今日初めて劇を披露するのだ。内容は「オオカミと七ひきのこやぎ」のパロディー版で、このところずっと、帰る前の部屋での時間をその練習に当ててきた。これは、子どもたちが好きで選んだ話である上に、役柄も希望を募って決めたもの。秋の創作展で作ったままごと用の「おうち」をこ

やぎの家に使うことにもなって、皆大乗り気であり、練習は毎日遊びの一コマだった。オオカミがしわがれ声でしゃべるとそのおかしさに歓声が上がる。「うんいいわね。そっくりね。」と私はうなずいた。こやぎが口々に叫ぶ。「おかあさんならやさしいこえだよ。おまえはきつとオオカミだろう!!」元氣な子に連れられて、あらあらと思うような子どもたちまでが大声を上げている。私は微笑まずにはいられない。調子に乗ったオオカミは「しまったばれたか。」と台本にもないことを言いながら退場、またまた笑いを誘う。雑貨屋役の女兒が私の方をチラッと見た。目が「もうでていってもいい?」と聞いている。間違えそうでちょっと心配な時、「これでどう? かつこういい?」と確かめてみたい時、「うまくいえたでしょう!!」とほめてもらいたい時、子どもたちの目はいつも私の中に飛び込んで来た。私はいつも、笑ってうなずいただけである。それだけで子どもたちは安心して「三びきのオオカミと八ひきのこやぎ」をでっちあげていった。一カ月間、私たちは劇ごっこを楽しんだ。

さて、お遊戯会を二、三日後に控えて絵練習が始まった。他の組の劇を見るのは皆初めてである。床にペタン

と座らされた子どもたちは、友だちの演技にまばたきもせずに見とれていた。また、練習を終えて部屋に帰る時の機嫌は上々であった。「おもしろかったね。ぼら(ぐみ)さんのげき、おもしろかったね。」「サイがさかだちしちやってさ……」「ゴリラがね……」。無邪気なものである。その時私は、まっ暗闇のどん底で頭をかかえていたのであった。部屋に入ると、私は子どもたちを呼び集めた。「ぎゅうぎゅうづめにして座ってちょうだい。ちょっとお話があります。何事だ、という顔をして子どもたちは集まった。静かになって全員の視線が集まったところでは口を開いた。「みんなね、今日の劇の練習とうだった?」「おもしろかった」。悪びれもせずに大合唱である。「そう、何がおもしろかった?」「ぼらさんのげき。」「ねんちようさんのヘンゼルとグレーテル!」「そうね、みんなとってもおもしろかったわね。……それじゃね、みんなの劇はどうだったと思う?」「……」。だってね、Bちゃんたらぶざけるんだもん。」「えっ、それじゃおまえはどうなんだ? いっしょにぶざけただらう?!」私が言おうとしていることがわかったのか、ひとしきり足の引つ張り合いが続く。「今日のはひどかったわね。見て

いる人たちにはきつと何をやっているのか全然わからなかったわよ。」「我が組の劇は惨たんたるものだったのだ。舞台上上がった子どもたちははしやいで。ピヨコピヨコ飛びはねるし、袖で控えている陰の役者たちは、二人組になって「おちゃらかほい」を始める。それでいて、いざスポーツライトを浴びる番になると、おじけづいて私の方ばかり見ているのである。私はこの光景を見て体から力が抜けていくのを感じた。もうすぐ年長組になるというのに、この幼さは何だろう。しかし、私にはすべて思い当たる節があった。だいたい、今回の劇を、見て頂くものではなく楽しむものとして進めてきたのは私であり、その間ずっと私は子どもたちの演出に関与してきたのである。今さら、先生に頼らずに、見てもらってわかるように演技しなさいという方が無理なのであった。私にはあわて、いら立ちにも似た反省の念にかられた。子どもたちも私のただごとならぬ様相を見て元気がなくなっていく。普段の甘えん坊、ぶざけん坊、ちゃっかり屋はどこへやら、皆しゅんとしてしまった。「このままでは大変よ、どうしたらいい?」私たちは深刻になった。「えーとね。もうおちゃらかやらない。」「ほくすぐにでて

いけるように、こうやってまってる。」すっきりとまとまった劇にならないのは当然のことで仕方ないとして、これで少しは落ち着くだろう、と私は子どもちの真剣な眼差しを信じることにした。

さて、その当日。本番間際になって、私は、私自身が残してしまった難題の解決を子どもたちに託した。無理は承知の上で、きのうまでの習慣を捨てるように頼んだのだ。「さあ頑張ってね。」幕が開く。劇が始まった。あのように言いはしたものの、私は子ども目の目が助けを求めて、また自慢気に私を見るのを待っていた。ところが話が進んでいくのに、いくら待っても、誰一人私を意識する子はいないではないか。私はあつけにとられた。きつねにつままれたような気分です子どもたちを見守った。劇は終わった。皆、最後まで立派だった。

幼くて不安だらけだったのは、どうやら私の方だったらしい。子どもたちはこの一年で大きく、その、目を見張るほど大きく成長していたのだった。「みんな、今日はどうしても良かったわよ。今までで最高だったわよ。」「せんせい、それさつきもいったよ。どうしちやったの？」支えて、支えられて……、私は、とにかくこの子

たちがかわいくて仕方ない。

私の保育は、子どもたちと共に自然の中で四季の移り変わりを感じながら過ごしてきた生活そのものである。私らしい保育のしかたがあるとしたら、それは幼稚園全体のやわらかい土の中から、今やと芽を出し始めたところと行って良いかもしれない。年少児を受け持ったこの一年、私は子どもたちの言葉に耳を傾け、その気持ちを出来る限り受けとめてやりたいと思いつけてきた。そればかりではいけないことを知りながら、私の心はいつも、受け入れる体勢をくずせなかった。

成長した子どもたちに向けて、今また新たに、「私の保育」を問いただす時が来たと実感している。

(聖路加幼稚園)

